

Title	現代の歴史的思考について
Sub Title	
Author	雄上, 統(Ogami, Osamu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.3 (1970. 2) ,p.100(364)- 101(365)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	発表要旨 彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700200-0100">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700200-0100</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

題にかぎるといふ楽感的な対独認識に加えて、反ソ的障害としてのドイツの存在を考えれば、対独戦争の必要性を認めないのは当然だろう。もしドイツによるチェコ攻撃が起ると、立場上、英国も対独戦争に巻き込まれざるをえない。これを回避するには、チェコに圧力を加えることによりドイツを満足させ、更にドイツをしてソ連を牽制させれば好都合であると考えたのかもしれない。いずれにせよ、以上の考察からかんがみて、ズデーテン問題処理にあつての英国外交が明確なる長期的目的意識によつて決定されていたとは云いがたい。

つまり当時の英国外交は、ズデーテン地方割譲という形でドイツを満足させることにより、英国自体がドイツとの戦争を回避しようとする、きわめて現実的な戦争回避の要請の結果に他ならなかつたように判断される。

(本塾大学院文学研究科修士課程在学)

### 現代の歴史的思考について

雄 上 統

「東は東、西は西」(キップリング)ということばはもはやなつかしいことばになつたともいえる。なぜならわれわれ現代人は世界の単一化あるいは統合化という時代に生きているからである。

例えば現代の哲学者あるいは文明批判家ともいえるオルテガ・イ・ガセットはつぎのようにそれを表現している。「今日では、平均的人間の生の内容が地球全体を包括しているのであり、各人は常時世界を生きているのである。地球上のいかなる部分といえども、もはや自己に与えられた地理的位置に閉じこもつてはおらず、地球上の他の場所に働きかけ多くの生的作用を及ぼしているのである。そればかりか世界はまた時間的にも増大した。」

オルテガはさらにつづけてつぎのようについて、「しかし、世界のかかる空間的・時間的増大も、それ自体では何の意味をも持たないであろう。物理的な空間と時間は、宇宙における完全に無意味な部分である。」

いかにしてこの現代の世界の空間的・時間的増大を位置づけ、意味のあるもの、われわれの理解しうるものにし得るのであるか。

これが現代の歴史家に与えられたひとつの使命といわなければならぬであろう。

トインビーはその著『歴史の研究』の中で、「総じて歴史は、創作的要素を完全にぬぐいきれないという限りにおいて、イースリアスに似ている。さまざまな事実の選択、整理および提示は、創作の領域に属する方法であり、したがつてひろく認められているように歴史家は同時に偉大な芸術家でない限り偉大ではありえないのである」といつて、さらに歴史記述様式の三種類、第一に「特定の事実の確認と記述」、第二に「法則の解明と形成」、第三に

芸術的創造と表現」の三つを挙げ、第三の「芸術的創造と表現」は資料が無数にある場合にとらねばならぬ方法である、といい、その際において「限られた言葉をもつて無限の直感を与え得るような特殊の表現の様式をとらぬ限り資料は意味ぶかい表現をもつことはないであろう」ことを指摘しているのである。

われわれの直面している現代の世界はこれを歴史記述という点から見ればまさにその様なものであらう。

ここに現代の歴史家あるいは文明批判家とも呼ばれている四人、すなわち英国のアーノルド・トインビー Arnold J. Toynbee (1889)、英国のクリストファー・ドーンソン Christopher Dawson (1889)、フランスのアンドレ・ジクフリーズ André Siegfried (1875-1959)、スペインのオルテガ・イ・ガセット José Ortega y Gasset (1883-1955) のそれぞれのいくつかの著作のなかを探究し研究してみると、現代世界に生きるわれわれに大きな示唆と教訓と理解を与えないではおかない事柄が数多く見出されるのである。これら四人はいずれもみな、このわれわれの直面する二十世紀の世界と真摯にとりくみ、これを著述していったが、またその各々がほとんど全世界に知られ読まれているという一般性と普遍性をも認識せねばならぬであらう。そのことはまた同時に、全世界の至る所どこであらうが、われわれの現代世界の直面する諸問題は、どの個人にしてもほぼ共通したテーマやファクターに焦点が絞られてきたということになるのであらう。そしてたとえこれを、

## 序

- 一、ヨーロッパについて
- 二、アメリカについて
- 三、アジアについて
- 四、ナショナルリズムと現代世界について
- 五、現代の科学技術と産業文明について

## 結

(以上論文目次)

についてみてゆくとき、この四人のそれぞれの著作の中における探求と研究の個所は、これをひとつにまとめると補いあい相対し相助けあつてそれが全体としてひとつの「現代の歴史的思考について」ともいべきものを提示するのである。

新しい時代においてこれから新しい現代の歴史論や文明論や現代論やあるいは未来論がでてくるとしても、これら四人の人々の業績を理解し回顧し再評価してみることは、われわれにとつて重要で意義のあることであると言わなければならないであらう。

(本塾大学院文学研究科修士課程在学)

## 統一に至るまでの

### 旧ファランへ党について

井上卓也

一九三〇年代初期にその源を発し、創立者ホセ・アントニオのファシスト思想とムッソリーニの影響を強く受けたナショナル・サ